

表現力豊かな児童の育成を目指して

一小5, 6年国語科と社会科の連携による読解力の育成一

愛西市立永和小学校 教諭 小出 哲平

はじめに

2003年にOECDが実施したPISA調査によって、日本の子供たちの読解力の得点が、参加国中の平均程度にまで下がったことが報告された。この報告は、子供たちの「学力低下」問題として国民の大きな関心を呼ぶきっかけとなり、「読解力向上」、「学力向上」が大きな課題となった。

実際に学習面において、算数科の単純な計算はできるが、文章題はできないという児童は多い。子供たちの解答用紙を見ると間違いの原因は、問題文を読まずに直感的に問題を解いていることによるものが多いように感じられる。また、問題文を読んでも理解できなかったのか、白紙のまま提出されているものも目立つ。社会科や理科のテストなどの穴埋め問題では、その文章の前後関係は全く無視して、ただ語群から適当に選んで記入している児童が多く見られる。そして、生活面においても、言葉の行き違いから起こるトラブルが多くなっていることが感じられる。児童と会話をしているとき、少し突っ込んだ質問をすると、「何となく」とか「分からない」という答えがすぐに返ってきてしまい、深い内容の話にならずに会話が終わってしまうことが多い。

このように読解力の低下は学習面だけでなく、生活面にまで大きな影響を与えており、やはり「読解力向上」は現在の学校教育において早急に解決すべき重要な課題であることは間違いない。そして読解力の育成は、国語科だけではなく各教科・特別活動や道徳、総合的な学習の時間などすべての学校教育活動の中で連携をとり、育成を図っていかなければならない。そこで、子供たちに確かな読解力を身に付けさせるための効果的な教科連携の在り方を研究することに取り組んだ。

1 研究の目的

(1) 身に付けさせたい読解力

ここで言う読解力とは、「文字だけではなく図表やグラフまで含めた資料の意味を分析的・批判的に読み取り、解釈し、自分の意見として表現する力」のことである。つまり読解力というのは「理解力」、「思考・判断力」、「表現力」の三つの力で構成されていると考える。

(2) 育てたい児童像

ア 理解力（情報の取り出し・解釈）

- ・資料を正確に読み取り、そこから既習の知識や経験と結び付け、自分の意見を構築することができる児童

イ 思考・判断力（熟考・評価）

- ・他人の意見と自分の意見を比較することによって、その違いを認めたり、自分の意見を修正したりすることができる児童

ウ 表現力（説明・論述）

- ・確かな根拠を基にして、積極的に自分の意見とその理由を分かりやすく表現することができる児童

2 研究の方法

(1) 研究の仮説

正確に資料を読み取る理解力を身に付け、周りの児童とかかわり合うことで思考・判断力を磨き、積極的に自分の意見を表現できる表現力が育てば、児童の読解力は高まるであろう。

(2) 研究の手だて

仮説を検証し、育てたい児童像の実現を図るため、小学校教育課程における教科連携として、小学校5、6年生の国語科と社会科を連携させ、授業実践を行うとともに、その有効性を検証する。なお、研究は2年続けて行い、よりよい教科連携の在り方を模索していく。

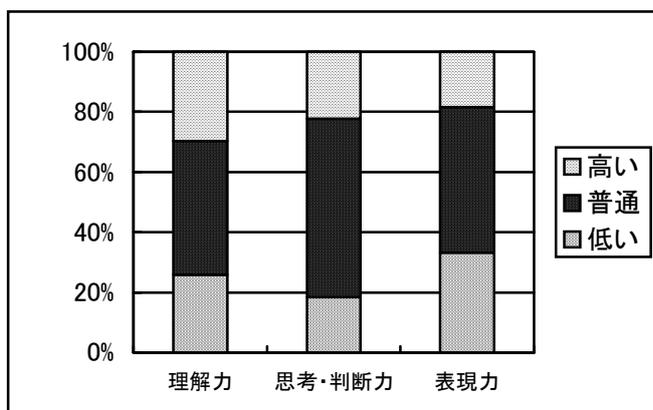
3 19年度の実践

(1) 19年度の児童の実態（平成19年度 2学期）

本学級は第5学年で男子16人、女子11人の27人の学級である。学年の雰囲気は一部の児童の発言力がとても強く、それ以外の多くの児童は言いたいことも言えず、その流れに従っているという感じが強かった。それは、この学年が18年度まで定員上限の2学級であったということも影響しているように感じられた。本学級の場合、4月当初、授業中に挙手をする児童は5人しかいなかった。その5人はどんな教科でも毎回挙手をするが、それ以外の児童は全くできないという両極端な構図が出来上がっていた。挙手をしない児童にその理由を聞いてみると、「間違えたら、いやだ」「間違えたら、恥ずかしい」「間違えたら、何を言われるか分からない」という声が返ってきた。今までの学校生活の中で傷つき、自信を失っている児童の姿が浮き彫りになった。

そこで、本実践においては読解力の中でも特に表現力の向上に重点を置き「確かな根拠を基にして、積極的に自分の意見とその理由を分かりやすく表現することができる児童」の育成を目指して研究を進めることにした。また、実践を始める前に、事前の児童の読解力を測るために、それぞれの理解力、思考・判断力、表現力を日々の見取りと簡単な調査から評価し、3段階で表した。調査方法は、例えば理解力の場合、児童に絵や写真が載っているプリントを配付し、それについて気付いたことをできるだけたくさん書かせるという形で行った。そして、その個数が6個以上は「高い」、3～5個は「普通」、1～2個は「低い」と評価した。その結果は以下のとおりである。（資料1）

資料1 事前調査結果



やはり、他の二つの力に比べて表現力が低い児童の割合が高い。挙手をし、発表をすることがないので、表現力が育たないのは当然であるのかもしれない。この学年はグループで協力して物事を進めることが上手なので、グループごとに課題を追究する中で、読解力を高めていけるのではないかと考えた。

(2) 19年度の研究の手だて

小学5年生の国語科「ニュース番組づくりの現場から」と社会科「ニュース番組をつくる人たち」の単元全体を連携させ、内容のまとまりごとに交互に進めながら、それぞれの教科で学習したことをお互いの教科にフィードバックする形で読解力の向上を目指す。また、読解力の構成要素の三つの力を身に付けさせるため、以下のように手だてを設定する。

ア 理解力（情報の取り出し・解釈）

・読み取りをする場面ではクイズ形式にして進め、答えは単語で抜き出すようにさせる。

→簡単に組み立てるので理解力の低い児童でも、抵抗感なく読み取りをすることができる。単純な単語に目を向けることで、キーワードが分かり、正確な読み取りがしやすくなる。

イ 思考・判断力（熟考・評価）

・グループ内の友達と協力して進めるように声を掛ける。

→周りの児童とかかわり合いを増やすことで、自他の意見を比較する機会が増え、新しい考えを知ったり、更に考えを深めたりすることができる。

ウ 表現力（説明・論述）

・司会マニュアルを配付し、それに沿って司会を進めさせる。

→定型の文章があるということと、それを何度も繰り返して聞くことによって、グループの中で話すことへの安心感が生まれ、自信をもって堂々と発表する児童の増加につながる。

・発表させるときには簡潔で、分かりやすい表現に心掛けさせる。

→聞き手を意識した分かりやすい言葉の表現を選び、それを発表することで、理解力が低い児童でも理解しやすい。

(3) 19年度の評価

次の二つの視点からそれぞれの変容を確認し、研究の成果を評価する。

ア クラス全体の変容

(ア) 読解力に関する事前・事後の調査結果

(イ) 日々の見取り

(ウ) ワークシート・提出物の記述

イ 個（抽出児）の変容

研究の成果を確認するために、事前調査結果から表現力が上位の児童A・中位の児童B・下位の児童Cを抽出児とし、変容を追うこととする。（資料2）

資料2 抽出児の現状と望む姿

児童A	児童B	児童C
この学年の中で一番目立つ児童で、周りの児童からは恐れられる存在。学力は高く、授業中はほぼ毎回挙手をする。発表の能力も高い。しかし、よく考えないで、直感的に他人の意見を攻撃したりするときもある。他人と協力し、物事をじっくりと考えることができるように支援していきたい。	力はあるが、全く挙手をしない児童。この学年において最も何とかしなければならぬタイプの児童である。非常にまじめで努力を惜しまないが、自信がなく表舞台に出ようとしない。まずは、成果を認めて自信を付けさせ、皆の前で堂々と発表できるように支援していきたい。	学力は少し落ちるが、まじめに努力する点においては児童Bと同じ。前年度にいじめられていたという話もあり、授業中に挙手することはなく、それ以外の場面でも言葉数は少ない。自信を付けさせ、挙手が1回でもできるように支援していきたい。

(4) 19年度の学習指導計画（資料3）

- ・ 単元名 国語科 目的に応じた伝え方を考えよう（15時間完了）
社会科 わたしたちの暮らしをささえる情報（12時間完了）

資料3 19年度の学習指導計画

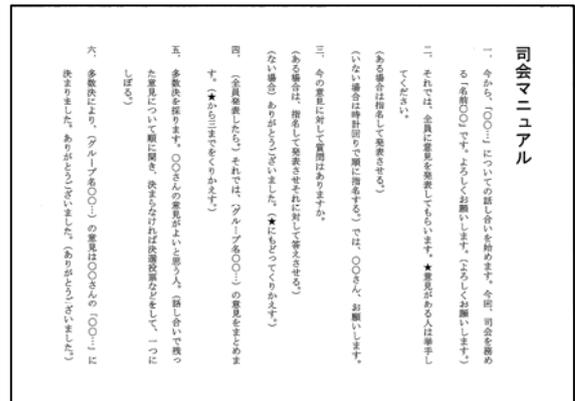
時数	国語科	育てたい読解力	時数	社会科
		・自信をもって積極的に発表する。(表現力)	1 2 3・4	どんな情報を、どのような手段を使って得ているのかを話し合う。 情報を送ったり、受け取ったりするときに、注意することは何かを話し合う。 テレビのニュース番組について調べ、話し合う。
1・2 3～5	ニュースの「特集」ができるまでの様子を読む。 番組づくりの過程で、大事な点や気を付けることを読んで理解する。	・キーワードに着目し、正確に読み取る。(理解力)		
		・分かりやすく記述する。(表現力)	5 6・7	ニュース番組づくりで、知りたいことや疑問に思ったことをまとめる。 知りたいことや疑問に思ったことを調べて、学習したことをまとめる。
6 7～12 13・14 15	学習に見通しをもつ。 取材を行い、効果的な発信について考えながら、取材したことを編集する。 「わたしたちの『特集』発表会」を開く。 単元全体の学習について振り返り、カードに自己評価・相互評価をする。	・多くの考えに触れ、自他の考えを比較する。(思考・判断力) ・自信をもって積極的に発表する。(表現力)		
		・自分の意見を、記述してまとめ、分かりやすく発表する。(表現力)	8 9・10 11・12	阪神・淡路大震災のとき、人々は必要な情報をどのように手に入れたのかを話し合う。 産業と情報のかかわりについて話し合う。 最近変わりつつある放送の現状を調べ、未来の情報社会がどうなるかを想像する。

(5) 19年度の研究の実際

ア 司会マニュアルを使った少人数での話し合い活動（社会科第1～4時）

「情報のことについて」や「テレビのニュース番組の工夫について」を話し合わせた。しかし、いきなり全体場で発表することは難しいと思われたので、最初にグループの中で話し合わせ、その後、グループの代表者に発表させるという形で進めることにした。グループで話し合いをするときには、必ず司会者を置いて話し合わせた。司会者には司会をする方法を載せたマニュアルを渡しておき、それに沿って話し合いを進めさせた。（資料4）なお、発表の代表者と司会者はグループの中で順番に回し、全員がその役を経験できるようにした。中にはうまく発表できない代表者が出ることもあったが、そういう場合は補足という形で同じグループの児童に助け船を出させた。

資料4 司会マニュアル



イ クイズ形式でのキーワード探し（国語科第1～5時）

「ニュース番組づくりについて」を教材文から読み取らせた。読み取りの授業になるとある程度、学力が無いと発言できない授業になってしまいがちなので、質問をクイズ形式にして、その文中からキーワードを探しながら進めていくという形で行った。

まず、ノートに教師が考えた括弧付きの文章を書き写させた。次にその括弧に当てはまる言葉を教材文の文中から探して埋めさせた。答えは文中のキーワードになる単語を選び、教材文と見比べればすぐに分かるようにした。最後に全部埋まったところで全体場で答え合わせをした。

ウ 分かりやすい記述（社会科第5～7時）

ニュース番組づくりで、知りたいことや疑問に思ったこと書き出させ、次にそれを調べさせ、最後に調べて分かったことをまとめさせた。まとめさせる前に、長文を書くと主語と述語の関係がねじれたりして、分かりにくい文になることと、単文で書いたり、箇条書きで書いたりするよさを確認し、今回はとにかく分かりやすく書くことに重点を置かせた。児童は「知りたいことや疑問に思ったこと」を次々と書き出した。そして、最終的に疑問の数を20ほどに絞り、クラス全員で共有化した。

調べる場面ではほとんどの児童がインターネットで調べていた。インターネットで調べ学習を行うと、サイトの文章を理解しないまま丸写しをするだけで終わってしまい、知識として定着しないので、自分の言葉で書き写させた。できるだけ短い文章で、自分が後から読んで分かる言葉でまとめさせた。

エ グループ内での話し合いと協力（国語科第6～15時）

これまでに学習してきたことを生かして、実際に自分たちでニュース番組をつくり、「わたしたちの『ニュース番組』発表会」を開くことにした。なるべく実際のニュース番組づくりと同じような流れで行わせることにし、グループの中で役割分担をしてCMも自分たちでつくらせることにした。グループは役割分担をして進める関係上、バランスを考えて教師が3班に分けた。



自作のマイクで取材中

役割分担のワークシートはこちらで用意し、まずはディレクターを決めさせた。それ以降も同様の流れで、ディレクターを中心にそれぞれの役割を児童たちで話し合っ決めてさせた。すべての役割が決まったグループから、ワークシートに沿って第1回企画会議を行い、ニュース番組の話題選び、取

材で明らかにしたい疑問，それをだれに取材するかを話し合わせた。その後，取材記者を中心に取材の計画を立てさせ，原稿を書かせてから取材に行かせた。それと並行してCM担当はCMを考え，美術担当は小道具などをつくり始めた。(資料5)皆で作り上げるという雰囲気を大切にし，手が空いている児童には，自分の役割にかかわらず，どんどん手伝わせた。取材が済んでからは，編集者を中心に放送原稿・テロップづくりなどが始まり，班の全員で協力して進めていく状態になった。その後の各班の動きを抽出児の活動の様子を中心にまとめた。(資料6)



グループで協力して作業中

資料5 各グループの第1回企画会議の決定事項

	1班(児童A)	2班(児童C)	3班(児童B)
話題	永和小の歴史	永和小の怖い話	4年生の2分の1成人式
疑問	・校長先生は何代目か ・昔の学校はどんな様子だったか	・学校で怖い経験をした先生はいるのか	・4年生がどんな発表をしたか ・4年生の児童や担任の先生はどう思ったか
だれに取材するか	・校長先生 ・長く勤務している先生	・いろいろな先生	・4年生の児童 ・4年生の担任の先生
CM	・眼鏡 ・ポテトチップス	・遊園地のお化け屋敷 ・紙芝居 ・車 ・ゲームソフト	・洋服屋 ・塾 ・消臭剤

資料6 抽出児の活動の様子

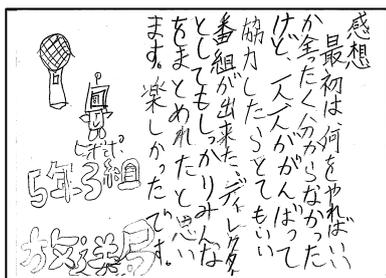
	児童A(ディレクター)	児童C(CM担当)	児童B(アナウンサー)
活動の様子	・積極的に意見を言い，自分が提案した「永和小の歴史」という話題で番組をつくることになった。 ・グループの中心となって，周りの児童に的確な指示を出し，番組づくりを計画的に進めることができた。 ・校長先生の取材に同行し，その後の放送原稿づくりの手助けをするなど，協力を惜しまなかった。	・教師の助言を受けて，男女で一つずつCMをつくることを提案した。その後は女子のCMを決める会議の司会になって話を進めた。 ・ディレクターと相談して，CMづくりの環境を整えた。	・美術担当と協力してマイクを作った。 ・原稿を書き上げ，取材に同行した。 ・取材が終わるとすぐに放送原稿づくりに取り掛かった。 ・下読みを入念に行い，すべての文を暗記するまで練習した。 ・最初は消極的だったCMにも参加し，教師にも出演依頼をした。 ・ニュースとCMのつながりの練習をやるようにディレクターに要求した。
本番の様子	・教師も知らないことを取材で明らかにして，うまく原稿にまとめることができていた。 ・小道具にいちばん凝っていて，独自のキャラクターをつくって，本物になりきって取り組んでいた。	・内容は少し物足りなかったが，グラフを使って分かりやすく説明していた。 ・CMの数が最も多く，工夫を凝らしたものが多かった。	・ニュースとCMの間のつながりの時間が短く，とても流れがよかった。 ・アナウンサーがその原稿を暗記して，はっきりとした口調で話すことができていたので，聞き取りやすかった。

そして最後に発表会の本番までを振り返り、反省をカードに記入させた。児童Aは「ディレクターとしてもしっかりみんなをまとめられた」と書き、児童Bは「全体的に大成功だった」「今までで、一番よかった」と書き、両者とも今回の発表会において十分な満足感を得ることができているようであった。児童Cは「書ききれないから」と教師にカードを2枚要求し、他のグループの発表についての感想をたくさん書いた。(資料7)そして「私は発表するのがきらいでしたが、今日はとても楽しくできました」と書いてあったことが今回の実践の何よりの収穫であると思った。

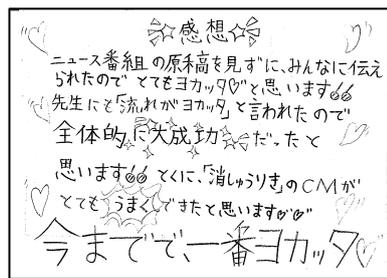


分かりやすく伝える

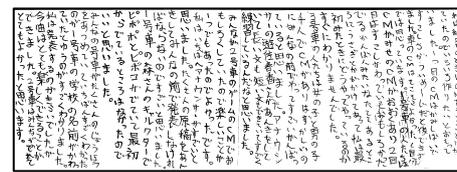
資料7 抽出児童の感想



児童Aの感想



児童Bの感想



児童Cの感想

オ まとめの個人発表で、分かりやすく伝える(社会科第8~12時)

「情報の大切さについて」改めて話し合わせ、「未来の情報社会」がどうなるかを想像させた。ここでの話し合いは、社会科の第1~4時までと全く同じ方法で取り組んだ。しかし、児童の様子はそれまでの社会科の授業とは少し違っていた。それまでに学習したことと、自分の普段の生活を重ねて考えることができていた。そして「未来の情報社会」がどうなるかを考えさせ、一人一人に発表させた。どの児童も分かりやすく発表することに努め、画用紙の文字を大きく書いたり、絵を描いて着色したり、発表するときのために画用紙の裏に発表用の原稿をはり付けたりしていた。声もほとんどの児童が大きく、早口になる児童はいなかった。更に分かりやすくするために、指で指して説明したり、自ら質問を受けたりする児童の姿が見られた。



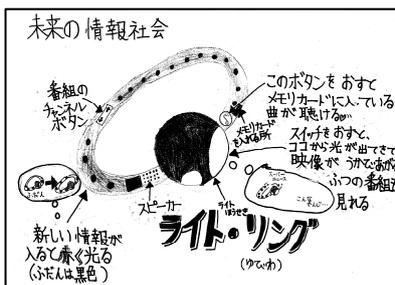
個人で発表する

児童Aはただ一人、箇条書きを使ってまとめ、周りの児童から分かりやすかったと称賛を受けた。また、最初に原稿を画用紙の裏に書いたのも児童Aであった。児童Bは得意な絵を生かして丁寧に仕上げ、皆の注目を集めた。他の児童から出た質問には黒板に図示して説明していた。アナウンサーでの発表の経験も生き、大きな声で堂々とはっきりとした口調で発表することができていた。児童Cは用紙いっぱい絵を描き、文字も大きく書き分かりやすくまとめることができていた。(資料8)

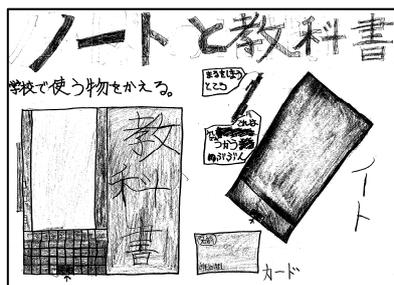
資料8 抽出児童の作品



児童Aの作品



児童Bの作品



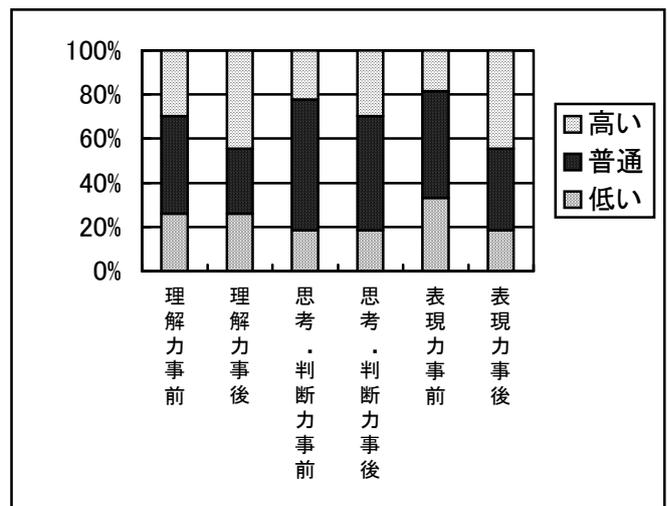
児童Cの作品

(6) 19年度の研究成果と課題

○が成果で、●が課題である。

- クイズ形式の授業では全体を通して挙手する児童の数が多く、普段は挙手をしない児童も挙手をして答える姿が見られた。読み取りが苦手な児童Cもキーワードを見付け、何度も挙手をして発表することができていた。
- グループ内で協力させ、かかわり合いを増やすことで、自然に話合いが生まれ、内容が深まっていった。児童Aの感想の中に「最初は、何をやらばいいかまったく分からなかったけど、一人一人ががんばって協力したらとてもいい番組ができた」と書いていたが、それ以外の児童の感想の中にも協力という言葉はたくさん見られた。
- 司会マニュアルを使った話合いは最初のころはぎこちなかったが、回数を重ねる内に、スムーズな話合いができるようになっていった。グループという小集団の中では、発表しやすい雰囲気があり、普段は挙手をして発表しない児童も話すことができていた。児童B・Cも司会者のときにはマニュアルに沿って、グループの話合いを仕切ったり、グループの中で発言したりすることができていた。実践前に挙手ができる児童は5人だったが、実践後は児童B・Cを含め19人になった。学級の雰囲気が変わり全体の挙手率が上がったことは大きな成果であったと思う。
- 単文で書くことや箇条書きのよさを知ることで、児童のまとめ方が大きく変わった。児童Aは書くことをめんどくさいと嫌っていたが、箇条書きでの簡潔なまとめ方は気に入ったようで、個人の発表でも活用していた。

資料9 事前・事後調査結果の比較



- 事後調査結果は全体的に向上が見られ、よい結果であった。(資料9) 児童Aはすべてにおいて現状維持であったが、課題であった仲間との協力がみられ、思考・判断力の深まりがみられた。児童Bはすべてが一段階上がった。児童Cは思考・判断力のみ上がった。(資料10)

資料10 抽出児の変化

	理解力	思考・判断力	表現力
児童A	高い→高い	高い→高い	高い→高い
児童B	低い→普通	普通→高い	普通→高い
児童C	普通→普通	低い→普通	低い→低い

- 国語科と社会科を連携させることで、国語科で学習したことが社会科で生かされ、社会科で学習したことが国語科で生かされるという相乗効果が生まれた。国語科と社会科の連携は、やりやすいという印象をもった。また、扱った内容が情報ということで、読解力を身に付けさせる单元としては最適であったように思われる。
- 今回の実践は児童がいろいろな役割に分かれてしまうので、評価が難しかった。今回は日々の見取りを中心に評価をするしかなかったが、読解力が身に付いたかどうかを客観的に判断できる評価の方法を考える必要がある。
- 表現力を育てることをねらったが、役割によってかなりのばらつきが出てしまった。アナウンサーや美術担当をやった児童は大きく表現力が育った。思考・判断力はグループ活動の中で予想以上に育ったが、今後、理解力をどのように育てていくのが課題である。

- 児童Cの一番の重点である表現力が上がらなかったのは残念である。しかし、最後の感想からも分かるように、表現しようという意欲は大幅に上がったのは評価できる。
- 今回の実践はもともとの読解力が高い児童には効果的であったが、読解力が低い児童には効果が出にくかったという印象をもった。

4 20年度の実践

(1) 20年度の児童の実態（平成20年度 1学期）

本学級は第6学年の学級で、男子16人、女子11人で、19年度からの持ち上がりの学年である。27人中、10人が持ち上がりの児童である。学級の雰囲気としてはかなり落ち着いている。しかし、話を静かに聞いているように見えて、全く伝わっていないということもよくある。授業中に挙手をする児童は12人いるが、そのうちのほとんどは「間違えると嫌だから」という理由で、自信が無い問題には答えようとしない。また、「全体の場で発表するのは恥ずかしい」という理由で全く挙手をしない児童もいる。結局、積極的に自分の意見を伝えようとしている児童の数は極めて少ない。

実際に学級活動の時間などで討論のような形が少しは出始めているが、人の意見を踏まえながら、自分の意見を発表することができているのは3人だけである。それ以外の児童も話はしっかりと聞いているが、ほとんどの児童は挙手もせず、意見をただ聞いて、最後の多数決のときに挙手をして自分の意志を表すのみである。

そこで、20年度の実践においても読解力の三つの要素のうち、特に表現力の向上に重点を置き「確かな根拠を基にして、積極的に自分の意見とその理由を分かりやすく表現することができる児童」の育成を目指して研究を進めることにした。また、実践を始める前に、事前アンケートをとり、児童の状況を確認した。その結果は右のとおりである。（資料11）

やはり読解力にかかわる要素のうち、「発表をする」が一番嫌われており、「嫌い」と「あまり好きではない」を合わせると、約半数が否定的にとらえているということが分かった。2番目に嫌われているのが「文章を書く」であり、表現にかかわるものに対して苦手意識をもっている児童が多いということがはっきりした。逆に一番好かれているのは「発表を聞く」であり、「好き」と「まあまあ好き」を合わせると、60パーセント以上の児童に肯定的にとらえられているのは面白い傾向である。

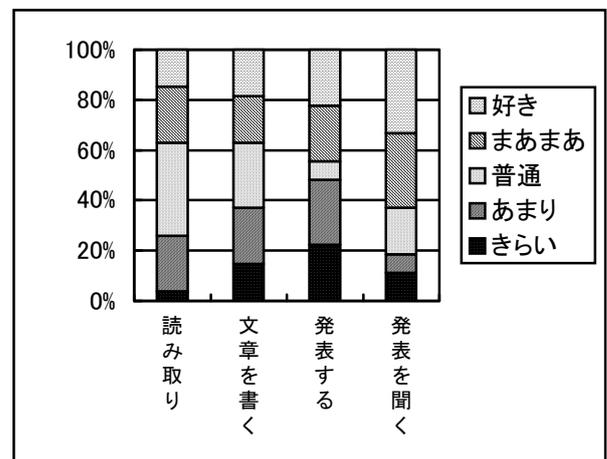
(2) 20年度の研究の手だて

小学6年生の国語科「学級討論会をしよう」と社会科「信長・秀吉・家康と天下統一」を並行して進めながら、国語科で討論会の基礎的な知識・技能を身に付けさせ、社会科でそれを更に発展させるという形で連携させることによって、それぞれを単独で行うよりも効果的に学習を進めることができると考えた。また、読解力の構成要素の三つの力を身に付けさせるため、19年度の実践を踏まえ、以下のように手だてを設定する。

ア 理解力（情報の取り出し・解釈）

- ・読書を励行することによって、読書量を確保し、基礎的な知識量を増やす。
- 語彙が増え、想像を膨らませやすくなる。記述問題の無答率の低さの改善を図る。

資料11 事前アンケート結果



・教師が精選した資料を与え、読み取りの方向付けをする。

→価値の低い情報を減らすことで、教師が読み取らせたい情報を正確に読み取りやすくなる。

イ 思考・判断力（熟考・評価）

・ワークシートを活用して、自分の意見をまとめさせる。

→児童の思考の流れに沿った構成にすることによって、自分の意見をはっきりとさせやすくする。

・話し合い活動の時間を毎時間、最低 15 分は確保する。

→じっくりと考えたり、周りの児童とかかわり合い、自らの考えを深めたりする時間ができる。他人の意見を聞いて、新しい知識を身に付けたり、それによって更に知識を深めたりすることができる。

ウ 表現力（説明・論述）

・意見を発表するときには、定型の発表スタイルに従って発表させる。簡潔で、筋道立った表現を目指す。

→発表スタイルを定着させることにより発表に対する安心感が生まれ、挙手をして発表する児童が増加する。

・学習で身に付けた知識をワークシートや紙に書いてまとめさせたり、口に出して発表・説明したりさせる。

→内にある自分の考えを外へ向けて発信することによって、考えがより確かなものになる。

(3) 20 年度の評価

次の二つの視点からそれぞれの変容を確認し、研究の成果を評価する。

ア クラス全体の変容

(ア) 読解力に関する事前・事後のアンケート結果

(イ) テストの結果

(ウ) ワークシート・提出物の記述

(エ) 授業記録から挙手数の確認、発言内容

イ 個（抽出児）の変容

研究の成果を確認するために、抽出児を 2 人（D、E）設定し、その変容を追うこととする。（資料

12）

資料 12 抽出児の現状と望む姿

児童D	児童E
<p>19 年度からの持ち上がりの児童。しかし、19 年度の実践においては、積極的な取組がなく、他人任せにしているところが多く見られ、ほとんど変容が見られなかった。</p> <p>授業中に話は聞いているが、挙手はほとんどなく、向上心もあまり見られず、事前アンケートで発表することは「嫌い」と答えている。ただ、6 年生になって社会科が好きになったと言っているの、それをきっかけに、積極的に学習に取り組む姿勢を育てたい。</p>	<p>20 年度から新しく受け持つことになった児童。授業中はしっかりと話を聞いているが、挙手が全くない児童。漢字などは丁寧に書くことができ、絵などを交えてまとめることがうまい。性格は控えめで自分から積極的に行動するタイプではなく、だれかの後に続いて行動する場面が多く見られる。事前アンケートで発表することは「あまり好きではない」と答えているが、自信を付けさせ、挙手が 1 回でもできるように支援していきたい。</p>

(4) 20年度の学習指導計画（資料13）

- ・単元名 国語科 学級討論会をしよう（6時間完了）
社会科 信長・秀吉・家康と天下統一（8時間完了）

資料13 20年度の学習指導計画

時数	国語科	育てたい読解力	時数	社会科	育てたい読解力
1 2	教材文を読み、 討論の様子 のCDを聞き、 討論会の準備 や進め方をつかむ。	・ワークシートを見ながら、 CDを聞き、 討論会の進め方をつかむ。 (理解力)			
3	討論会の話題を決める。	・グループで話し合い、目的に合った話題を考える。 (思考・判断力)	1	天下統一を目指した3人の人物について理解する。	・ビデオを見て内容を読み取り、それをワークシートで確認する。(理解力)
4	自分の意見を明確にして準備を進める。	・自分と他人の意見を比較しながら、グループごとに話し合う。(思考・判断力)	2 3 4	織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の業績を知る。	・グループでワークシートの穴埋めに取り組み、内容を理解する。(理解力)
5 6	討論会①を行い、それを振り返り、討論会②を行い、まとめとする。	・自分の意見を分かりやすく発表する。(表現力) ・自分と他人の意見を比較しながら考える。(思考・判断力)			
			5 6	討論会の準備を進める。	・自分と他人の意見を比較しながら、グループごとに話し合う。(思考・判断力)
			7 8	討論会①を行い、それを振り返り、討論会②を行い、まとめとする。	・自分の意見を分かりやすく発表する。(表現力) ・自分と他人の意見を比較しながら考える。(思考・判断力)

(5) 20年度の研究の実際

ア 国語科

(ア) ワークシート・CDを使った読み取り（第1・2時）

教材文にしたがって討論会の基礎的な知識・技能を身に付けさせることに重点を置いた。教材文の読み取りになるが、実際の教材文と全く同じ討論会シートを用意し、教材文に沿って記入させながら、授業を進めていった。記入がすべて済んだところで、討論会の様子のCDを聞かせ、実際にどのような形で討論会を進めていくのかを確認した。CDを使い、聴覚を使った読み取りにしたので、普段の授業の読み取りが苦手な児童でも、抵抗感なく取り組むことができていた。

(イ) 討論にふさわしい話題を考える (第3時)

自分たちの討論会の話題を考えさせた。全体場で意見を出させたが、なかなか意見が出なかったため、グループごとに話し合いをさせると、活発な話し合いになった。その後、意見を発表させたが、それでも話題が決まらなかった。結局、教師がいくつか提案し、「動物園にいる動物は幸せか」という話題に全会一致で決まった。そして、子供たちの意見を取り入れ、学級を賛成派と反対派と討論を聞く三つのグループに分けた。児童D・Eを含む、判断に迷っている13人の児童は全員、討論を聞くグループにして、両方の立場に質問をし、討論会の最後で自分の立場を明らかにさせることにした。賛成派と反対派の児童は同数になるように分けた。



グループで話し合う

(ウ) ワークシートに沿ってグループごとに準備を進める (第4時)

以前配ったものと全く同じ討論会シートを配付し、それに沿って国語の教材文と同じ順番で考えさせ、記入させた。どの児童もすらすらと記入することができていた。まず、個人で記入させ、自分の意見をはっきりさせた。児童D・Eは討論を聞くグループだったが、二人とも、なぜ迷っているのかという理由をしっかりと書き、両グループへの質問を考えることができていた。その後で各グループごとに話し合わせ、主張や意見をまとめさせた。

(エ) 討論会で自分の意見を分かりやすく発表する (第5・6時)

いよいよ討論会を行った。討論会は机をコの字型にして並べ賛成派と反対派を向かい合わせた。司会は教師が行い、討論会の進め方は教材文の進め方を元に少し変更して行った。初めの主張から始まり、討論を聞くグループからの質問、それに対する答えで進行した。発表するときは、まず意見を言い、その後に理由を言うという簡単な定型の発表スタイルに従って発表させた。それに沿った形で発表しないと周りから、「違ふよ」と声が上がった。レベルの高い児童になると、暗記して発表する児童もみられた。討論を聞くグループからは次々と質問が出され、討論会は白熱したものになった。(資料14)しかし、児童D・Eはなかなか鋭い質問を考えていたにもかかわらず、結局質問することなく終わってしまった。



討論会直前の緊張した様子

休み時間を挟んだところで、討論会を振り返り、反対派の児童から自分たちも相手へ質問したいという要求があったので、お互いに質問をさせた。それによって討論会はより白熱したものになった。結果としては討論を聞くグループのうち3人が「幸せである」、児童D・Eを含む10人が「幸せではない」という結論を出した。反対派の勝因は、命の保障はなく食料の不安もある点を認めた上で、なお、自然に生きることの素晴らしさや、家族と一緒に暮らすことのよさを、うまく心情に訴えたところにあったように思う。反対派の児童の感想には、「大きな声で自分の意見をはっきり伝えることができてよかった」というものと「もう少し、自信をもってはっきりと話せばよかった」というものが半々だった。賛成派の児童は「意見がしっかり言えなかった」「質問にうまく答えることができなかった」というものばかりであった。討論を聞くグループの児童は児童D・Eをはじめとして「質問すればよかった」という後悔が目立った。予想以上に充実した討論会の内容にもっと積極的に取り組めばよかったという児童の気持ちが読み取れた。



自分の意見を発表する

資料 14 国語科の討論会で出た意見

<p>反対派 (幸せではない)</p>	<p>賛成派 (幸せ)</p>		<p>話題</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・自由に行動できる。 ・好きな時間に、好きな物が食べられる。(えさが新鮮) ・家族と一緒に暮らせる。 ・自然の中で暮らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他の動物に襲われることが無く安全である。 ・絶対にえさがもらえるので、食料の心配が無い。 ・病気になっても、人間が治してくれる。 	<p>初めの主張(理由)</p>	<p>動物園にいる動物は幸せか？</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・家族全員で連れて行かれた場合や、動物園生まれの動物の場合は動物園にいても幸せと言えるか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日の命の危険があるのに幸せか。 ・毎日食料がとれるわけではないのに幸せか。 ・強い者が弱い者を食べるが、弱い者は幸せか。 ・生まれた場所(自然)から離れて暮らすのは幸せか。 	<p>相手からの質問</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・生きるために食べているので、仕方がない。 ・それが自然の厳しさなので、仕方がない。 ・それが自然の厳しさなので、仕方がない。 ・そう思うが、そういうケースはめったにない。本当の自然を知らないで生きるのはいかかわいそう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全で死の危険が少ないからよい。 ・少しは違う種類があると思うし、食べられないよりはまし。 ・周りに動物もいるし、一人つきりではない。 ・家族と離れるのは寂しいかもしれないが、人間がかわいがって世話をしてくれる。 ・安全で死の危険が少ないからよい。 	<p>その答え</p>	

イ 社会科

(ア) ビデオを使った読み取り (第1時)

6年生になり、社会科は歴史を学習する。5年生までの社会科とは大きく異なるので、児童の戸惑いや変化は大きい。本学級の児童の場合は児童Dをはじめとして、「6年生になって社会科が面白くなった」「好きになった」とその変化を肯定的にとらえている児童が多い。本単元に出てくる三英傑は児童が日本の歴史の中で最も興味・関心をもつ人たちであるが、非常に時間数が少ない。これではせっかく地元に住んでいるのに、その素晴らしさが伝わらない。そこで、社会科の学習をより効果的に行うために、時間配当に軽重を付け、時間をかけて行うことにした。

この時間は、導入ということで、興味・関心をもたせ、予備知識を付けさせることをねらった。そこで児童にとって抵抗感が少なく、文章の読み取りが苦手な児童でも、視覚的にとらえることができるアニメのビデオを見せた。ビデオの後には、ワークシートを配付し、三英傑の性格・生き様の違いについてまとめさせた。その授業の最後に今後の授業で参考にするるとよい本についても紹介した。授業の後も、教師への質問が絶えなかったのは、20年度初めてのことだった。また、隣の学級の児童にも、その授業で分かったことを少し興奮した様子で伝えたりしていた。児童Dはこの授業が終わった時点で、もう「信長がいい」と言っていた。

(イ) ワークシートを使った読み取り (第2～4時)

三英傑の業績について一人ずつ順番に紹介していった。最初は織田信長の業績を記入したワークシートを配付した。ワークシートには小学校レベルでは学習しないような内容でも、その人物の性格・生き様が表れているようなものは入れて紹介した。また、重要な部分は穴埋め問題にし、それを埋めながら理解させていった。教室の生活グループごとに協力して取り組ませ、早くできたグループから答えを黒板に書かせることにした。その後、答え合わせをしながら、教師の方からその業績についての説明をしていった。話を聞く時間がどうしても長くなってしまうので、児童が飽きてしまうのではないかという不安があったが、できる限り児童が興味をもてそうな話題を精選して話をしたので、特にそういうことはなかった。次の豊臣秀吉も、その次の徳川家康も、同じ流れで進めた。黒板に記入したいためか、どのグループも意欲的にワークシートの穴埋めに取り組むことができていた。また資料のどの辺りを見れば詳しいことが載っているかということに気付いたり、三英傑はお互いに関連しているので、前のワークシートを見るとヒントがあるということに気付いたりする児童も出てきた。ここまで、学習を進めたところで、「3人の武将の中で、だれが一番魅力的か？」という話題で討論会を行うことにした。



ワークシートの穴埋め

(ウ) ワークシートに沿ってグループごとに準備を進める (第5・6時)

グループ分けをし、グループごとに討論会の準備を行った。前回の討論会では討論を聞くグループが多くなりすぎたことと、討論を聞くグループの発言が少なかったということが反省としてあったので、討論を聞くグループの人数をなるべく少なくなるようにした。結果として今回の討論会は児童Dを含む織田派8人、児童Eを含む豊臣派7人、徳川派7人と討論を聞くグループ5人の4グループに分かれた。



グループでの話し合い

それぞれのグループに分かれ、この討論会用の討論会シートを配付すると、児童はすぐに初めの主張を書き始めた。今までの学習で学んだことだけですらすらと書け

ている児童もいれば、今までのワークシートを見ながらじっくりと考えている児童もいた。今回は準備の時間を2時間とって、じっくりと考えさせた。どこのグループも今回は2回目ということもあり、予想される自分たちへの質問とその答えがよく考えられていた。逆に相手への質問が少し考えにくかったようであった。それぞれのグループの活動の様子は以下のとおりである。(資料15)

資料15 各グループの活動の様子

	織田派	豊臣派	徳川派	討論を聞くグループ
準備の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・児童Dともう一人の児童が中心となって取り組んでいた。 ・遊んでいるように見受けられる児童がみられた。 ・児童Dは周りの児童に対しても、優しく声掛けをし、協力を呼び掛けた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・皆で考え、皆でまとめていくスタンスにこだわっていた。 ・進みが一番遅かったが、よく考えられていた。 ・児童Eはグループの一員として意見を出し、初めの主張の文の校正に加わっていた。(資料16) 	<ul style="list-style-type: none"> ・席の近い2, 3人で相談しながら、しかも全員が同じ方向を向いて進んでいた。 ・個人の意識が高く、個人的に調べを行った児童が数人いた。 ・調べて分かった新事実を、主張の中に取り入れていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・最初はバラバラに質問を考えていた。 ・ある児童を中心にまとめ、グループのメンバーの質問を調整してそれぞれのグループへの質問の数をそろえた。

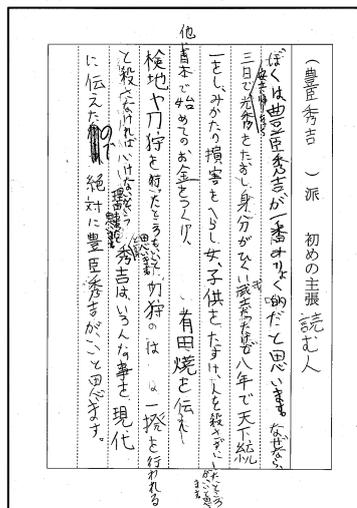
(エ) 討論会で自分の意見を分かりやすく発表する (第7・8時)

まとめの討論会を行った。机を口の字型にして並べ、前方に討論を聞くグループを並べた。司会は教師が行い、討論会の進め方は前回と同様で、それぞれのグループの初めの主張から始まり、討論を聞くグループからの質問、お互いのグループへの質問という流れで進めた。今回も定型の発表スタイルに従って発表させたが、このころには発表スタイルもかなり定着し、児童Dもそれに倣って徳川派へ質問をすることができた。今回の討論会は、それぞれの武将に対する思い入れが強いので、前回よりも更に白熱した展開になった。質問に対して何とか答えようとグループ内で話し合ったり、同じグループの発表の後には拍手が起こったりした。

そして、途中で休み時間を挟んだが、豊臣派はうまく答えられなかった質問の答えを探すために、児童Eを含む5人がコンピュータ室へ向かった。そしてインターネットで調べ、次の時間の最初に答えを発表した。答えられなかった質問を自らの問題と認識して、自ら調べ、答えを出すその姿勢は素晴らしかった。お互いのグループへの質問を出し切ったところで、討論を聞くグループにそれぞれの結論をまとめさせた。

結果としては討論を聞くグループのうち2人が「織田」、1人が「豊臣」、2人が「徳川」という結論を出したが、最終的に徳川派の勝利となった。質問の受け答えの中で、家康が我慢をして耐え忍びながら、人々が平和に暮らせる時代の総仕上げを行ったことをうまくアピールできていた点と、学級のだれも知らなかった事実を見つけ、魅力を伝えることができた点を評価した。(資料17)

資料16 豊臣派初めの主張



インターネットで調べよう

資料 17 社会科の討論会で出た意見

徳川派	豊臣派	織田派	話題
<ul style="list-style-type: none"> ・徳川家のために、我慢をして自分の妻と息子を自害させた。 ・朝鮮へ兵を送らず、力を蓄えた。 ・征夷大將軍になった。 ・水道管をしいて、江戸の町を整備した。 ・平和な江戸時代を築いた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身分が低いところから出世した。 ・八年で天下統一した。 ・信長の死後、一番に駆けつけた。 ・味方の損害が少ない戦法を好んだ。 ・女・子供を殺さないように努めた。 ・日本で初めてのお金を作った。 ・検地や刀狩を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しくて、美しい安土城を築いた。 ・だれもが自由に商工業をできるようにした。 ・争いのない時代の第一歩になった。 	<p>三人の武将の中で、だれが一番魅力的か？</p> <p>初めの主張（理由）</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・自分が仕えていた秀吉の遺言を無視して勝手なことをしたのはよいのか。（児童D） ・妻と息子を助けずに自害させたのはよくないのではないか。 ・言いがかりを付けて、豊臣家をほろぼしたのはよくないのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中国を従えようという野望をもって、外国人まで苦しめているのはよくないのではないか。 ・自分は低い身分から出世したのに、身分を固定しようとするのは、ずるくないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・すぐに人を殺そうとするのは、よいことか。 ・女・子供まで殺す必要はないのではないか。 ・神仏をばかにしているような態度はよくないのではないか。 ・家来の意見を聞かなかったり、ばかにする態度をとったりしたので、恨まれて殺されたのではないか。 	<p>相手からの質問</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・人の言いなりになってばかりでは、家来がついてこない。 ・徳川家を守るためには仕方なかった。悲しかったと思う。 ・戦国の世なので、豊臣をほろぼさないと自分が危ない。天下をとるチャンスなので仕方がない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・息子を亡くした悲しみを、紛らわすために出兵したという説もある。農民を助けるためかもしれない。 ・平和な世の中にするために、これ以上武士を増やしたくなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・戦国の世なので殺したり、殺されたりは仕方ないこと。みんなやっている。 ・女・子供も悪いことはしているかもしれない。 ・神仏を信じるのは自由。 ・家来の言うことを聞きすぎると、逆に自分が殺される。 	<p>その答え</p>

(6) 20年度の研究成果と課題

○が成果で、●が課題である。

- 読書を励行することによって、児童の読書量は少し増えた。19年度の実践のときの学級では図書室で本を全く借りなかった児童が多かったが、20年度の本学級の児童は1学期の時点で全員2冊以上は借りていた。特に女子に効果があったようで、多い児童だと1学期だけで40冊以上の本を借りて読んでいた。教室内で読書をしている児童の姿も多く見られるようになった。男子だと、歴史漫画を借りている児童が多く、知識を深めることができたようだ。また、児童Dは家でも歴史に関する番組を好んで視聴するようになったようで、興味・関心の大きさと比例して知識量は増えた。
- 普通の読み取りでは力を発揮できない児童でも、CDやビデオなどの視聴覚教材を使うことにより、抵抗感なく、読み取りをすることができた。教師が見せたビデオや授業で使ったワークシートがそのまま討論会の有効な資料になった。それ以外には、教科書や資料集、教師が図書室から持ってきた本を使わせ、それ以外の資料は与えなかった。もし、インターネットによる調べをさせていたら、論点が多くなりすぎて、討論会の話の焦点がぼやけていたと思う。

- 児童の思考の流れに沿ったワークシートを使うことによって、児童は思考を整理しながら、自分の意見をまとめて記入することができ、児童は迷いなく学習を進めることができた。児童Dは書くことが嫌いで、今まではワークシートを配られても積極的に記入することはなかったが、今回の実践では毎回、枠からはみ出すほど記入することができていた。(資料18) 討論会の基本的な流れは変えずに、その討論会ごとに、ワークシートを用意したことがよかった。

資料18 児童Dのワークシート

予想される質問とその答え		他の立場への質問		初めの主張 (理由)	主張する 立場	話題
答え	質問	答え	質問			
それは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。	「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「(豊臣) 派へ 香るは、外国に去るまで、外国のものを盗むことはいけません。どう思いますか？」	(織田) 信長 () がいちばんみりよく的である。	三人の武将の中で、だれがいちばんみりよく的か？
「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「(豊臣) 派へ 香るは、外国に去るまで、外国のものを盗むことはいけません。どう思いますか？」	「(織田) 信長 () がいちばんみりよく的である。」	三人の武将の中で、だれがいちばんみりよく的か？
「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「(豊臣) 派へ 香るは、外国に去るまで、外国のものを盗むことはいけません。どう思いますか？」	「(織田) 信長 () がいちばんみりよく的である。」	三人の武将の中で、だれがいちばんみりよく的か？
「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「あなたは、明徳光栄が分けてくれたから悪いとは思いません。」	「(豊臣) 派へ 香るは、外国に去るまで、外国のものを盗むことはいけません。どう思いますか？」	「(織田) 信長 () がいちばんみりよく的である。」	三人の武将の中で、だれがいちばんみりよく的か？

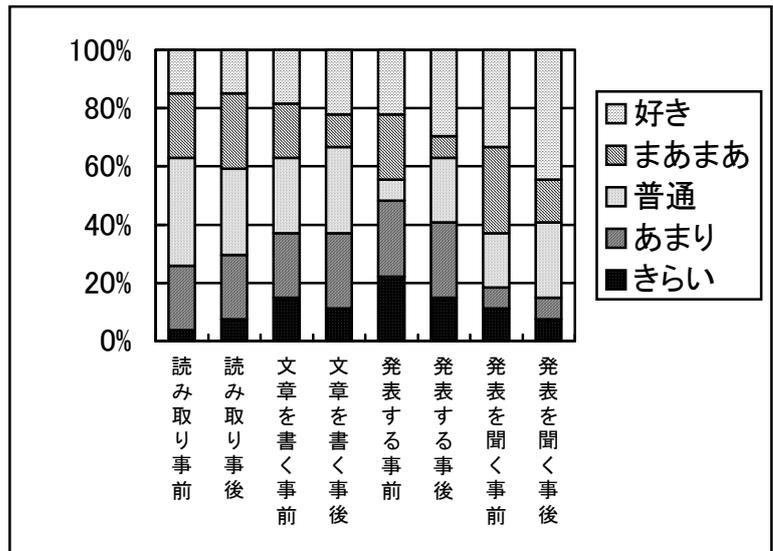
- 普段の授業では、黙って聞くばかりの児童が多いので、話し合う時間が毎時間確保できたことはよかった。相互理解が深まり、グループの中で話しやすい雰囲気が生まれた。特に討論会のグループは同じ考えをもつ仲間であることから、お互いに助けようという意識が働いた。同じグループの仲間が発表した後には、自然に同じグループの仲間から拍手がわき起こるようになった。それによって安心感が生まれ、発表しやすい雰囲気が生まれたことは予想外のことであった。児童Dが感想の中で、「とても、すごい言い合いで聞いているだけで楽しく感じました」と書いており、人の意見を聞く楽しさも再認識できたようであった。
- しっかりと発表できた児童をきちんと称賛することによって、発表スタイルが定着してきた。慣れもあってか、児童の挙手は増えた。(資料19) 普段の授業でも挙手は増え、挙手をする児童は12人から22人になった。児童Dもそのうちの一人で、よく挙手をするようになった。

資料19 討論会の児童の挙手の数

	0回	1回	2回	3回以上
討論会 (国語)	10 (児童D・E)	7	6	4
討論会 (社会)	8 (児童E)	5 (児童D)	6	8

○ 事後アンケート結果から「発表をする」と「発表を聞く」の要素の変化が大きかった。(資料20)「発表をする」の要素では「嫌い」と「あまり好きではない」を合わせた割合が10パーセントほど減り、「好き」と「普通」の割合がその分増えている。「発表を聞く」の要素では「好き」だけで10パーセント増えている。討論会がこの二つの要素を向上させるのに有効にはたらいたということが分かる。

資料20 事前・事後アンケート結果の比較



○ 児童DもEも望ましい方向への変化が見られた。特に児童Dは「発表をする」の要素が上がったことが評価できる。普段の授業での挙手も、みられるようになった。児童Eは「発表を聞く」の要素が二段階上がったことが評価できる。今まで何となく聞いていた他人の意見に興味をもてるようになったことは、大きな変化であると思われる。(資料21)

資料21 抽出児の変化

	読み取り	文章を書く	発表する	発表を聞く
児童D	まあまあ→あまり	嫌い→普通	嫌い→あまり	好き→好き
児童E	普通→まあまあ	普通→好き	あまり→あまり	普通→好き

○ 「書くこと」の要素は児童D・Eともに二段階上がった。社会科に対する興味・関心の高まりにつれて、知識が身に付き、書くことに対する抵抗感がなくなったと考えられる。実際に最初から社会科への興味・関心の高い児童Dはテストの記述問題が最初のころからよく書けている。児童Eは興味・関心の高まりとともによくなっており、その変化は顕著であった。「貴族」と「武士」のテストでは無答であったが、「天下統一」のテストでは「信長がキリスト教を保護したのはなぜか」という問題に「鉄砲がほしいから」と一応答えを書いた。そして「まとめ」のテストでは「秀吉が刀狩りを行ったのはなぜか」という問題に「農民から武器を取り上げて、いっきを起こさないようにして、農業に集中させるため」と理由を明確に書くことができていた。学級全体でもテストの無答が減り、解答の質が上がっていることが確認された。(資料22)

資料22 記述問題の解答の質の変化

	無答	普通の解答	よい解答
5月(貴族)	6(児童E)	16(児童D)	5
6月(武士)	5(児童E)	14	8(児童D)
7月(天下統一)	1	22(児童E)	4(児童D)
7月(まとめ)	1	8	18(児童D・E)

○ 国語科で学習したことを、社会科で生かすという形で連携を図った。連携させることによって、討論会を何度も行うことになり、子供たちの表現力を効果的に磨くことができた。また、社会科に対する関心・意欲が高かったことも、討論会を白熱させる一因になり、更に効果が上がったように

思う。また、討論会をする中で、多くの他人の意見に触れ、社会的認識を更に深めることもできた。

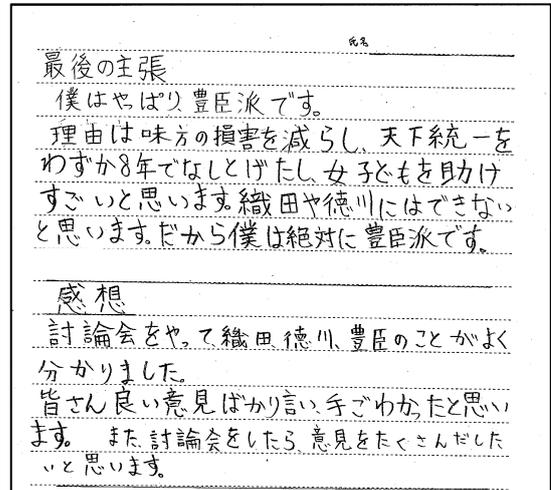
- 児童Eの「発表をする」の要素が変わらなかったのは、残念であった。しかし、感想の中では「また、討論会をしたら意見をたくさん出したい」と意欲を見せている。(資料23) また、「文章を書く」の要素は上がっている。言葉による表現力は十分ではないが、書くことによる表現力は高まったのではないかと思う。

- 事後アンケート結果からも分かるが、「読み取り」の要素の向上がみられず、児童Dの「読み取り」の要素も下がってしまった。これは今回の実践において理解力を高めることが不十分であったということを示しており、大きな課題と言える。

- もともと挙手をしなかった児童の発表スタイルの定着は悪く、いまだ全く挙手をしない児童もいる。今後も討論会を続け、自信を付けさせたり、教師が補助をしたりしながら発表させ、最終的には全員が自分の意見を皆の前で発表できるようにしていきたい。

- 20年度は、19年度よりも多角的に子供たちをとらえ、評価をすることができたと思うが、それでも客観的な評価ができているとは限らない。読解力を測る適切な評価の方法を考えていかなければならない。

資料23 児童Eの感想



5 研究のまとめと今後の課題

読解力は国語科を中心として他の教科と連携させながら身に付けさせていくのが一番やりやすい形ではないかと思う。今回の実践において児童はいきいきと活動し、読解力を向上させることはできたと思われる。しかし、読解力を客観的に測定することは難しく、その成果を証明することも難しい。

読解力向上のためにまず、児童の興味・関心を高め、理解力を高めなければならない。しかし、理解力をすぐに付けることは難しい。読書量を増やして地道に積み重ねていったり、ビデオやCDなどの視聴覚教材を利用したりする中で、有効な手だてを探していかなければならない。

しかし、今回の研究で読解力を高めるために、まず表現力を身に付けさせることが有効であることが分かった。表現することの面白さが分かれば、もっと相手にいろいろなことを伝えたいと思うようになり、その内容についてよく考えるようになる。そしてコミュニケーションをとり、お互いの意見を交換する中で、思考・判断力と表現力は更に高まる。表現力があれば、理解力が低い相手にでも分かりやすく伝えることができる。(資料24)

今後も討論会などの話し合い活動を各教科の中で継続し、読解力の向上を図っていきたい。

おわりに

20年度の全国学力学習状況調査の結果が公表され、やはり活用型の問題の得点率が低かったことが報告された。結果としてやはり、子供たちの読解力が十分ではないという結論が出た。これによって、子供たちの読解力を更に高めるための研究がされていくことになると思うが、この実践を通して分かったことは、読解力だけを育てることはできないということである。又は育てても意味がないということである。興味・関心、そしてそれを支える知識がなければ、思考は中途半端なものになり、表現

したとしても、その内容は陳腐なものになってしまう。つまり、活用する材料が少なければ、大した活用はできないということである。まず、興味・関心を高め、ある程度の知識を身に付けさせなければならない。子供たちの中にこれら二つの材料が備われば、課題を探究することが可能となり、おのずと読解力は高まっていくように思われる。

資料 24 読解力育成の手だて

